

水野祥太郎先生を悼む

川 村 次 郎

水野祥太郎先生は心筋梗塞に急性肺炎を併発され5月10日未明、川崎医大附属病院において死去された。この数年間は前立腺と白内障の手術、心筋梗塞などのためよく入院されていたが、その間にも医学概論、海外技術援助など多方面の活動を続けられ、著書も着々とまとめていかれた。最後の著書になった「ヒトの足—この謎にみちたもの」は死去の日に上梓され、葬儀のさい参列者に配られた。

先生に最初にお目にかかったのは私が大阪市立大学医学部に入学し、育英会奨学金の面接のときであった。この頃の先生は40歳代の張り切った整形外科教授として、教室員を叱咤されながら当時の難病である脊椎カリエスや、ポリオに早朝から深夜までメスを振るわれ、脊髄損傷の歩行や尿路管理に取り組んでおられた。

整形外科の講義だけは午前8時からと決っており、私達医学生は先生の熱弁に強烈な衝撃を受けるのがつねであった。先生は教室員をよく叱責されたが、当時の教室の方々は私には不思議に見えるほど明るく、のびのびと振る舞っておられた。いつの間にか私自身が整形外科のカンファレンスや回診などに、学生的身で加えさせてもらうようになった。

1年間のインターン生活で北海道かぶれをした私は、「北海道へ行きます」と大阪市立大学の教授室へ挨拶に行った。先生はドイツのHabermann兄弟の例をあげ、大阪に残って、すでに役所を辞めて家業を継いでいた私の兄と協力するようにさとされた。その日のうちに私は

阪大病院へ連れていかれ、当時の七川助教授や柳谷医局長などへ紹介され、阪大入局が決ってしまった。

大阪大学に戻られた先生は先天股脱やベルテス病などの股関節整形外科に精力を注がれるようになったが、足、歩行、義肢装具、リハビリテーションへの情熱も持ち続けておられた。教室における先生は一日中怒鳴っておられるように見えたが、今思えば最後の結論は各自の判断に任せられ、決して自分の考えを無理強いされなかった。カンファレンスや回診などでは、先生の期待される答えが出てくるまでこれでもかこれでもかと私達を責めたてられたが、先生から解答を言いだされることはなかった。若い私達にはそれが先生の意地悪としか感じられず、私達の酒の肴はいつもおっさん（陰ではみんなそう呼んでいた）のことであった。しかし学会への列車内で発表原稿を口述してくださり、海外での発表原稿全文を英訳してくださったのも先生であった。

昨年11月、バイオメカニズム学会創立15周年記念講演をしていただいたさい“川村、パークレーの歩行の資料をやろう”と言われ、まもなくEberhartの歩行と義肢に関する基礎研究のマイクロフィルムを届けていただいた。抜群の記憶力はまったく衰えず、世の中のあらゆることに関心を持ち、つねに私達の2歩前を見ておられた。

人生の最後の瞬間まで全力疾走された先生であった。

（大阪労災病院リハビリテーション診療科部長）